

# 阪神淡路大震災 23年聖餐式 社会部主催・防災学習会

## 〜キリストと共に〜

1995年から23年の月日が流れた2018年1月17日(水)、神戸聖ヨハネ教会(阪神淡路大震災復興記念聖堂)を会場に、震災23年聖餐式(司式・小林尚明主教)が執り行われ、平日にもかかわらず約60名の方々が参加、共に震災犠牲者の魂の平安と震災によって今なお心に傷を負った方々のために祈りをささげました。

礼拝での奨励は、震災当時、関西学院大学神学部・大学院生だった塔田直文さん(神戸聖ヨハネ教会信徒)。塔田さんは下宿先であった西宮で被災、幸いにも震災の少し前に下宿先がリフォームされていたため、建物の倒壊は免れ、怪我は免れました。しかし、同じ敷地内にある大家さんのご自宅と、もう一つの学生寮は地震によって崩れ落ち、塔田さんをはじめとする何名かの学生たちで救助・救命活動を行いました。塔田さんは大震災の時、多くの人々が、理由もなく様々な場所に「集まった」ことが印象的だったと語られ、そして人々が集まる場所にこそキリストが共にいてくださる

こと、人々の痛みを分かち合ってくださいと語られていることを感じ取ることができたといい、震災体験から奨励の最後に「キリスト共に(増補版13番)」を選ばれ、御自身のギターの伴奏で、参加者と共に讃美を捧げられました。



## 防災の備え・協働性の力

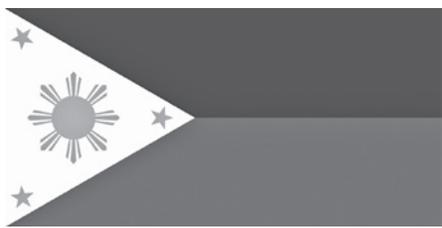
礼拝後、12時半より社会部主催「第2回・防災学習会」が行われました。講師は大震災当時、神戸聖ヨハネ教会の牧師だった中村豊主教。阪神淡路大震災の際、ヨハネ教会は私設避難所として自力で生活できない高齢者の受け皿となったことや神戸教区の初動について語られました。一方で阪神・淡路大震災当時、公的機関は宗教団体に否定的な反応でしたが、東日本大震災では宗教団体に好意的になり

「聖テモテ・ボランティアセンター」が公的に認知されるなど、時代の変化を紹介されました。また南海トラフ地震を想定した備えについて、個人的なこととして感震ブレイカーの設置など。教会として信徒の安否確認や被災者収容体制の構築などを語られました。



講演後、グループに分かれ「災害への備え」「災害が起こったら」という2つテーマで話し合いの時間がたれました。  
(広報部 浪花 記)

## 特集 世界のイースター



国民の大多数がローマ・カトリックの信徒であるこの国

で、イースターは社会行事となつていきます。日本のクリスマスと違うのは、そこに人々の精神性や信仰がまだ色濃く残っているということ。イースター礼拝は、深夜のヴイジル(徹宵礼拝)から始まり、日中に大抵の教会では5〜6回は行われます。どこの教会もイースターは、老若男女人でいっぱいになります。教会の外でも、閉じることのできない病院や空港、そしてホテルやデパートなどで、教派を問わない礼拝が行われます。

しかしイースターをめぐる社会現象は、すでに聖週(イースター前の月曜から土曜日)に始まり、町中のカトリック教会の鐘楼からパッションの朗唱が夜も昼も聞こえ、巷では、ピザ屋も「野菜とチーズの特別ピザ」しか配達しないし、聖木曜日が近くなると観光客用以外のレストランからビール(主に聖ミカエル・ビール)が消えてなくなります。首都のバス停では、郷里でイースターを過ごす人々の長蛇の列。どこに行っても、おでこに「灰の十字架の印」をつけた人々が現れ、聖木曜日や聖金曜日は町から喧騒がなくなり、近所の家々からロザリーの祈りが聞こえ、交通機関も公共機関も麻痺します。そのような中で、「光あれ」。待ちに待った

イースターがやってきて。子どもたちはイースターエッグを捜し、イースターのお祝いは、教会から家庭へと引き継がれます。大斎から復活への巷の陰影とでも言う様なものが、私たちの信仰を揺れ動かします。

イースターには、聖公会の聖マリア大聖堂でも、教区登録している信徒数を遙かに超える数の人々が聖餐にやってきました。近隣のカトリックや独立教会、また路傍の人々も来ているのです。司祭たちは何のためらいもなく、外来の客にパンを与えます。昔、アベリオン大主教が、「本当は路傍に出て行って人々を招待しなければならぬのに」、「フィリピンでは神様が客を連れてきてくれる」と述べたことを思い出します。これらの人々に門を開く教会を見ても、フィリピンにおける市井の人々と教会の密接な関係性と、イースターが教派の祭りではなく、すべてのキリスト教(社会)共同体の祭りになっていることが分かります。

(執事 遠藤雅己)  
神戸国際大学

